

『ファビアンは宇宙の果て』

峰岸由依

【あらすじ】

1945年7月、学徒兵の宇賀英治は死亡する。が、気がつくと2021年の7月、高校の旧校舎で、女子高生・茨城椿の体で目覚めていた。高校に顔を出すと、椿の同級生・秋濱朝陽に「お前、椿じゃないだろ」と詰め寄られる。朝陽は椿以外に友達がおらず、椿を非常に大事に思っていた。二人は椿を元に戻すため協力することになる。

朝陽に助けられながら宇賀はなんとか茨城椿として現代の学校生活を送る。二人はこの現象について調べるが、なんの手がかりも見つからない。そんな中期末試験で学年トップを取った宇賀に同級生たちが勉強を教わりにくる。二人は彼らから「夏の夜に旧校舎にいると幽霊に取りつかれてしまう」という噂を聞き、夜の旧校舎へと向かう。

そこにいたのはクラスメイト・月岡だった。月岡は茨城椿を元に戻すことができるという。喜ぶ朝陽だが、月岡は「この現象は椿が死を願っていないと成立しないはず」と言う。朝陽は椿の悩みに気づきつつも聞かなかったことを後悔し、それでも椿を取り戻したいと泣く。

宇賀と朝陽は宇賀のかつての恋人の家に向かうが、椿がその女性のひ孫だとわかる。宇賀はかつての恋人と再会するが、彼女の目に映っているのはひ孫の椿だけだった。自分の居場所がないことを痛感した宇賀は、一人その場を抜け出す。朝陽は宇賀をなぐさめようと彼が好きだったという花火を見せるが、宇賀は花火に空襲を幻視する。ホテルに戻るとウクライナの侵攻のニュースが流れていた。関係ないことのようにテレビを消す朝陽。宇賀は嘔吐し、気を失う。

京都から戻った宇賀は、朝陽に今の世界が戦前となんら変わった宇賀はないこと、自分の戦争への無関心がこのような世界を残したと吐露する。朝陽は宇賀の豹変に動揺するが、宇賀

が残した本の書き込みを見て、彼の罪を共に
背負うと告げる。
宇賀はその後、PTSDに悩まされながらも残さ
れた時間を必死に生きる。朝陽は宇賀に、私
の体に入っていないと告げるが、宇賀はそれだ
けはできないと笑う。
宇賀が消えた後。楯の元には宇賀が残した奨
学金の通知が届く。朝陽はかつて興味がない
と切り捨てた戦争のニュースを見て、選挙に行
く。

○清瀬家・玄関（77年前）

日本家屋の玄関内。

脱帽し、土間に立つ第三種軍装の宇賀

貞治（23）。もんぺ姿の清瀬三千代

（45）が応対している。

宇賀「（穏やかな笑みで）そうですか、お二

人とも」

三千代「（残念そうに）せっかくいらしてく

ださったのに……」

宇賀「いえ。勝手に伺ったのはこちらですか

ら。じゃあ、僕はこれで」

宇賀、背を向け帰ろうとする。

三千代「（慌て）宇賀さん！……頭が、頭

はすぐ戻るはずです。上がってお待ちにな

ってください」

宇賀、微笑み、

宇賀「すみません」

三千代「でも……でも、次いつ会えるのかわ

からないのですから」

宇賀「（微笑んだまま）だから会わんです」

三千代「——」

宇賀「失礼します」

宇賀、深く礼をし、格子戸を開け、出

ていく。

× ×

清瀬頭（19）、風呂敷包みを抱えて

格子戸を開け、帰宅する。

頭「ただいま」

三千代、慌ただしく奥から走ってきて、

三千代「（慌て）会ったかい！？」

頭「え？」

三千代「（察し）ついさっき、こちらに宇賀

さんが。引き止めたんだけど、すぐに帰

ってしまっただけ」

頭「——」

三千代「（頭から風呂敷包みを奪い）早く、

電車がもうすぐのはず」

頭「——ありがとう！」

頭、外へ走る。

○等持院駅・ホーム（77年前）
ホームに立ち、電車を待つ宇賀。
懐かしむように周囲を見る。

○市街地・道（77年前）
頭、必死に走る。
途中、出陣する学徒兵を祝う集団が小旗の日章旗を手に万歳三唱しているが、気にも留めず走る。

○等持院駅・ホーム（77年前）
ホームに立つ宇賀。
電車が停留所に近づいてくる。
宇賀、ふと改札の方を見る。

○同・改札口ホーム（77年前）
頭、息を切らし改札に駆け入り、ホームに入る。
宇賀を探すが、ホームには老人がベンチに座っているだけ。
頭、荒い息で立ち尽くす。

○隅田高校・旧校舎（朝）
人気がないがらんとした教室。
その床で、茨城椿（17）が眠っている。頭の下にクッション。長い髪が床に広がっている。
椿、ゆっくりと瞼を開ける。

○同・同・男子トイレ（朝）
古い男子トイレ。
椿、鏡の前で鏡に手を伸ばし、自分の姿を見つめる。
椿「つぶやくように」頭さん……」

○隅田高校新校舎・教室
英語の授業中。
前の扉が開き、椿が入ってくる。
教師A「あれ、茨城！めずらしいね遅刻」
椿、穏やかに笑い、右手を頭の上に乗

橋「ど、げかけて下げ、一礼し教室に入る。」

橋「空いている席に座ろうとするが、二つ空席があるのに気づき止まる。」

教師A「どうした、早く座りな」

橋「……」

○同・廊下

人気がない廊下を、秋濱朝陽（17）が歩いていく。高い位置でリボンを結んでいるツインテール、制服の上に来ているパーカー、厚底の靴。

○同・教室

橋、どちらに座ればよいのか固まっている。と、後ろの扉が開き、朝陽が入ってくる。

教師A「秋濱、お前はまた遅刻か！」

朝陽「おはようございます」

朝陽「つかつかと進み、空いていた席の片方に座る。」

教師A「高すぎる靴もやめろって言ってるだろ」

朝陽「（教師のほうを見ないまま）以後気をつけます」

教師A「まったく：少しは茨城を見習え」

橋「ほっとしてもう一つの席に座る。まわりの生徒たちが橋に笑いかける。」

隣の生徒「どしたの橋？ 超寝過ぎた？」

橋「は。寝過ぎたのなんでもんじゃないよ。少し離れた席で、朝陽がそれをじっと見つめている。」

○同・同

休み時間。

橋、自分の席に戻る。

と、机の上の教科書の下からルーブリの切れ端がのぞいている。

椿「？」

椿、ルーズリーフを取り出す。

『お前の秘密に気づいている。放課後、一階応接室まで来い』

椿「（固まり）――」

生徒A「どうしたの？」

椿「！」

椿、とっさにルーズリーフを隠す。

椿「なんでもないよ」

生徒A「――椿、なんだか――（じっと椿を

見つめる）疲れてない？ 大丈夫？（心配

げに）」

椿「（少しほっとして）ぜんぜん。そう見え

た？」

朝陽がその横を通りぬけ、教室の扉を

大きな音を立てて閉めて出ていく。

生徒A「（苦笑いして）こっわ。さすが秋濱

さん」

椿「……（考えている）」

○同・廊下（放課後）

生徒たちが談笑しながら帰っていく。

椿、応接室の前に立つ。

ドアを開ける。

○同・応接室

椿がドアを開けるが、暗く、無人。

椿、戸惑いつつ中に入ると、ドアの陰

にいた朝陽が後ろから椿の口を抑える。

椿「！？」

朝陽「騒ぐな」

朝陽、後ろ手にドアの鍵を閉める。

椿「（もがき、朝陽から離れて）何するの、

急に」

朝陽「それはこっちのセリフだよ！」

椿「……？」

朝陽「お前、誰だよ」

間。

椿「……は？ 茨城椿。クラスメイトでしょ」

朝陽「そういうこと言ってんじゃねえよ！」

朝陽、いらついたように壁に拳をぶつ
ける。

朝陽「お前、茨城椿じゃないだろ」

椿「しばらくして、椿、ゆったりと笑い、
朝陽「なんだ。もうばれちゃったんだ」

朝陽「お前……！」

椿「失礼」

つかみかかろうとする朝陽を、椿、穏
やかに制止し、

椿「あまり近づかないでもらえるかな」

朝陽「ふざけんな！ お前は誰なんだよ。椿

はどこに」

椿「緊張してしまふ。初めてなんだ。女性に

こんな……近くで話されるのは」

朝陽「（あつけにとられ）は？」

椿「（微笑み）僕の名前は宇賀貞治。帝国海

軍第801航空隊の海軍少尉」

朝陽「——」

椿「よろしく。秋濱朝陽さん」

窓の外に、スカイツリーが見える。

○タイトル『フェアビアンは宇宙の果て』

○（回想）小学校・教室

教室で一人窓の外を見ている朝陽（1

0）。リボンのついたツインテール。

子供の声「見て、アニメみたいな髪型。もう

高学年なのに」

大人の声「ほら、あそこお父さんいないから」

大人の声「ああ、それで。かわいそうに」

朝陽、口をきゅつと絞める。

椿（10）、そばにやってきて、

椿「わあ、すごい髪」

朝陽、きつと椿をにらむ。

椿「（笑って）似合ってる。かっこいいね」

朝陽M「清く正しく美しい。茨城椿をあらわ

すなら、その言葉がふさわしい。あたしの、

完璧な友人」

○（回想戻って）隅田高校新校舎・応接室

朝陽「机をはさんで向かい合う橋、朝陽。その橋を、あんたが乗っ取ったってことね」
 橋「乗っ取った、か。そういうことになるのかな」
 橋「考える橋。」
 橋「さっき話した通り、僕は第801航空隊の偵察航空兵で、昨日――昭和二十年七月十五日未明、夜間哨戒任務中敵機に撃墜された。はずだ」
 朝陽「今日は何年何日よ」
 橋「2022年。令和四年七月十五日」
 朝陽「そしてこの体は茨城橋。墨田区立隅田高校二年」
 朝陽「そう！お前じゃない！出てって！」
 橋「何が何だか」
 朝陽「てかお前男じゃねーか！まじで許せないんだけど！悪霊退散！」
 橋「僕の頭が良すぎて靖国から追い出されたかなあ。和を乱しかねないからな」
 朝陽「いいからとっとと出てけクソじじい！」
 橋「僕は23だぜ」
 朝陽「昭和生まれでしようが！」
 朝陽「スパークソじじいじゃん！」
 朝陽「朝陽、叫んだあとうつむいて、」
 朝陽「ほんとに、橋を、返してよ……。あたしの、たった一人の友達なの」
 橋「……秋濱さん……。たった一人しか友達がいないのは、君の人間性に問題があるのでは？」
 朝陽「死ぬクソじじい！」
 橋「この機会に友達を増やしたほうがいいんじゃないかな」
 朝陽「朝陽、鼻で笑い、」
 朝陽「あんた、学校でなんでみんなが必死に友達作るかわかる？一人でいると憐れまれるからだよ。他人からも自分自身からも。」

それが嫌だから、みんな大して好きでもない奴らとつるんでるの。お互いにストレスをためながら

椿「……」

朝陽「あたしは違う。たった一人でも本当の友達がいればいいの」

椿「なるほどね。たしかにそれはとても素敵な生き方だ。ただ、困った時、誰の手も掴めないかもしれないけど」

椿、背後にあるガラス張りの棚を見る。学校の歴史を示す写真などが飾られている。白黒の写真の中で、当時の生徒たちが

椿「それで、いつなんだ？」

朝陽「――は？」

椿「大東亜戦争に負けたのは」

朝陽「大東亜……？」

椿「名称が違うのか。太平洋戦争か？ 教室に入った瞬間、やはり負けたんだとわかったよ」

朝陽「なんで」

椿「勝っていたら、英語の授業をする必要がない」

朝陽「……」

椿「それに奉安殿もない。男女が同じ教室で並んで座っている。ここは府立だろ？ この国が自らそういうことをするとは思えない。そうせざるを得ないような、主権を脅かされる機会があったと考える方が自然だ」

朝陽「……たしか、八月の何日かだったはず」

朝陽「……昭和二十年、八月、十五日だ」

椿「……（微笑んだまま）そうか」

朝陽「……あ、黙って過去の卒業生の写真を見つめたの？」

朝陽「……あなた、本当に昭和二十年から来たの？」

椿「（振り返らず）僕こそ訊きたいよ。本当に今は西暦2022年なのかって」

朝陽「……とにかく。(椿を指さし)クソ狸
じじい。あたしは必ず椿を取り戻す。あん
たは老人ホームでおとなしく折り鶴でも折
ってな」

椿「(振り返る)」

朝陽「あんたがどんなに無念だろうが、椿は
あたしの大切な」

椿「協力するよ」

朝陽「たった一人の……は？」

椿「だから、この体を椿さんに戻すために僕
にできることがあるれば何でもするよ。椿さ
んに申し訳なさすぎる」

朝陽「(信じられず)なんか企んでる？」

椿「(穏やかに)諦めるのは慣れてる」

朝陽「――まあいい。とにかく、これからは
基本的にあたしと行動して。椿が戻った時

に困らないようふるまってもらうし、あん
たが何か企んでるようならすぐ止める」

椿「ああ。こちらとしても助かる」

椿「あ。こちらとしても助かる」

朝陽「じゃあ、しばらくよろしく。宇賀貞治だ」
に送り込んでやる」

朝陽、椿の手に自分の手を勢いよく叩

きつける。

椿「だけど、惜しいな」

朝陽「は？」

椿、壁に掛けられたカレンダーの前に

歩き、七月をめくる。

椿「あと一か月。あと一か月だったのになあ」
カレンダーの八月の十五日。

○朝陽の家・洗面所(夜)

ヘアアイロン、ドライヤー、化粧水な

どが散乱している。

朝陽、それを片付けている。

洗面台の上のスマホに通知がきて、朝

陽、スマホを手に取る。

椿「今日は、どうもありがとう。」

椿「ちゃんと、送れているかな。」

朝陽「（引き気味）おじさんLINE：：」
玄関から鍵を開ける音がして、朝陽の
母・紫暮（42）、入ってくる。
紫暮「ただいまー！　：：どしたのこれ」

○同・台所（居間（夜））

朝陽が作り置きのお皿からおかず
を皿に盛り、紫暮は二人分の茶碗にご
はんをよそっている。
食卓には二人分の椅子。
朝陽「それでね、そいつがまじで何も知らな
くて」

○（回想）同・洗面所（数時間前）

朝陽の家でシャワーを浴びた後の椿。
そのまま出ていこうとするので、朝陽
が乱暴に引き止め顔に化粧水を塗る。
洗面台の上に並ぶ乳液やオイル。

朝陽の声「保湿はしないし」

×　×　×
ぬれた長髪を乾かそうとしている椿。
バスタオルで一気に乾かそうとして、

朝陽に止められる。

朝陽、バスタオルで髪を優しく叩くよ
うにして見本を見せる。

朝陽の声「髪を乾かし方もめちゃくちゃだし」

×　×　×
朝陽、椿の髪をブラシで梳きながらド
ライヤーで乾かす。

朝陽「椿の髪は長いからちゃんとケアしない
とすぐみすぼらしくなっちゃうから」

椿「（うんざりして）ちよっと時間かけすぎ
じゃ」

朝陽「ある程度着飾ることは人間の条件のひ
とつだよ」

椿「そんな大層なもんかね」

朝陽「自分の体に気を使えない人が他人を大
事にできるわけないんだから」

椿「：：。Costly thy habit as thy purse can buy?」
T「可能な限り着るものには金をかけよ」

朝陽「……は？」
椿「ハムレットだ。知らない？」
朝陽「……じじいのくせに英語喋るな！」
椿「理不尽」

○（回想戻って）同・食卓。

朝陽「ほんと大変だった」

紫暮「でも教えてあげたんだ」

朝陽「それは……」

紫暮「でもちよつと安心した。朝陽いつも椿ちゃんの話しかしないから心配してたけど」

朝陽「またそれ？ あたしは大丈夫だって」

紫暮「まあまあ。転校生の子なんだって？」

どここから来たの」

朝陽「それにそいつは友達じゃない」

紫暮「あんた、またそうやって」

朝陽「……ねえ」

紫暮「ん？」

朝陽「生まれ変わりって、本当にあると思

う？」

紫暮「え……なに、急に。どうしたの」

朝陽「いや、ごめん。なんでもない」

リモコンのスイッチを押して、テレビ

をつける朝陽。

ウクライナ侵攻のニュースが流れてい

る。

朝陽「あ……もうパンダとかのニュースだ

け見てたいわ」

朝陽、すぐにチャンネルを変える。県

知事選についてのニュース。

紫暮「あんたも来年にはもう選挙か」

朝陽「高校卒業してからじゃないの」

紫暮「18になったらもう大丈夫だよ」

朝陽「ふーん。ま、興味ないわ」

朝陽、チャンネルを変える。外国人観

光客に日本の好きなどころをインタビ

ューしてしている番組。

朝陽「（きつぱりと）あたしには、椿とママ

がいればいい」

○ 橋の家・橋の自室（夜）

橋、自室に入り、ドアを閉める。
何かを考えている。

○ 高校・教室（日替わり・朝）

登校してきた生徒たちでにぎわう朝の教室。
朝陽、むすつとした顔で一人席に座り、スマホの橋とのトーク画面を見ている。
昨夜、朝陽が「眉毛の整え方」などの動画のアドレスを送っている。今朝になつて「迷わず学校これそう？」
「橋…大丈夫。」などのやりとり。
時刻はもうすぐ八時半。
と、橋…ついた」と表示。
朝陽が眉を寄せると、教室の入り口の方で女子の沸いた声が聞こえる。
生徒B 「えーめっちゃいい！」
生徒C 「似合ってるよ、茨城さん！」
朝陽が顔を向けると、教室入り口で橋が女子生徒数名に囲まれている。
その髪は綺麗に三つ編みの編み下げにセットされている。
朝陽 「…はあ？」
橋、朝陽に気づいて、自慢げにウインクをしてくる。

○ 同・同（点描）

漢文の授業中。
橋、黒板に「不顧後患」の書き下し文を書いていくが、ところどころ旧字体が混ざっている。
何人かのクラスメイトと教師が怪訝な顔をする。頭を抱える朝陽。
× × ×
授業が終わり、漢文の教師が出ていく。朝陽、旧字体と新字体の対応表が書かれたルーズリーフを乱暴に橋の机に叩きつける。

○同・廊下（トイレの前（点描））

クラスメイトと話しながら歩いてきた
橋、トイレの前でクラスメイトに手を
振り男子トイレに入ろうとする。
突然走ってきた朝陽が橋を突き飛ばす。

○同・自動販売機前（点描）

クラスメイトと橋。
クラスメイトが自動販売機でお茶を買
う。

橋、自動販売機を近くで見て、「¥1
50」「¥180」といった値段を見
て固まり、ふらつく。
心配するクラスメイト。それを見てだ
めだこりゃ、といった顔の朝陽。

○同・教室（点描）

英語の授業中。教師が音読をしている。
午後の授業ゆえか、クラスの何人かは
眠っている。
朝陽、しかめつらをしながら教科書
越しに橋を見る。
橋、妙に穏やかな笑みでクラスメイト
達を見ている。
それはまるで慈しむような笑みで、朝
陽、少し毒気をぬかれる。
窓から入った風がカーテンをゆらし、
教室を撫でていく。

○同・同（放課後）

授業が終わり、帰っていく生徒たち。
女子生徒二人が橋に手を振り帰ってい
く。

生徒D 「じゃねー橋！」
生徒E 「もうクラスLINEに誤爆すんなよ
ー」

橋、手を振り見送ると、机につっぷす
朝陽のそばに行く。教室に残っている
のは二人だけ。

橋「（嬉々と）いやあ、素晴らしいよ。こんな
のまるで近代国家だよ。同じ日本だとは思
えないよ」
朝陽「うるせーよぴーちくぱーちく…まじ
で入学以来一番の疲れだわ」
橋「ご苦労様だね」
朝陽「誰のせいだと思ってるのこのうすらス
マイルじい！ ったく」
朝陽「ちよつと飲み物買ってくるから。ちゃ
んとここで！ 大人しく！ 待っててよね」
へらへらと笑顔で手を振る橋。

○同・一階自動販売機前々廊下

朝陽、ドクタ―ペツパーを購入する。
少し離れた場所にいた生徒たちが朝陽
を見てひそひそ声で笑う。

生徒F「アニメみたい」
生徒G「あのリボンつける意味ある？」

朝陽、気にせずドクタ―ペツパーを飲
み、歩き去る。

教師B、朝陽に気づき声をかける。

教師B「秋濱。いい加減普通の恰好したらど
うだ。もったいないぞ、せっかく美人なの
に」

朝陽、無視して通り過ぎようとする。

教師B「あのな、そんなんで社会に出た後苦
労するのはお前なんだぞ。ほら、あの子を
見る！ 完璧な着こなした」

教師B、朝陽の後ろの階段を上ってい
く生徒を指さす。

面倒くさそうに振り返った朝陽、おど
ろき口に含んだドクタ―ペツパーを吹

き出しそうになる。
階段の生徒はなみなみと水の入ったバ
ケツを抱えた橋。

朝陽「バカあんたなに」

橋「（バケツを置き、深く礼をして）先生。

ご苦労様です」

教師B「（感動して）礼儀もしっかりしてい

朝陽「大人しく待ってろつつたでしょ！？」
橋「暇だから窓でも拭こうかなと」
朝陽「そんなに水はいらねえ！」
教師B「なんて見上げた生徒だ」
橋「ありがとうございます。先生。ところで、先生はフアシズムの和訳はご存じですか？」
教師B「フアシズム？ あー、独裁だっけ」
橋「はは。まあ、そういう面はありますが、正確には結束主義と訳されます」
教師B「へえ」
橋「（涼やかな笑みでぺらぺらと）同じ集団の全員を、一つの目的のため結束させる。その時、目的に役立たない異質なものは排除されます。自分たちと異なるものを受け入れる余裕の欠如。先の戦争でみなが同じ服を着させられ、同じ言葉をしゃべらせられ、同じ神社に詣でさせられたのもそういうことでしょう」
教師B「（気圧され）はあ」
橋「しかし先生のご懸念ももつともです。不必要に周囲と衝突する人間は信用を得にくく、翻って本人の益にならないでしょう」
朝陽「（あきれた顔）」
橋「ですが、このような珍妙な服装の人間でも問題なく暮らしてゆけるということこそ、今のこの国の平和の象徴ではないでしょうか」
教師B「ま、まあ……そういう面もあるかもしれないな。そうとも言えるか。かな？」
橋「ありますがどうぞいませ！ さあ秋濱さんきたまえ。一緒にお掃除をしよう」
朝陽「は？ ちよつとあんたあたしは別に……ちよつと！」
橋「強引に朝陽を連れて階段を上っていく。」

○同・教室
バケツを抱え、教室に戻る橋と朝陽。

朝陽「息の荒い二人。
助けてくれたわけ？」

朝陽「余計なお世話なんだけど！あたしは
あんなの慣れてるし、あんなはなから理解
するつもりもない奴らなんてどうでもいい
の！その覚悟を持って生きてるの！」

朝陽「いまいまして首を振り、背を
向け教室から出ようとすする。
朝陽、雑巾を濡らし、窓ガラスを拭いて
いる。」

朝陽「……ごめん。でも」
朝陽「……ごめん。でも」
朝陽「……ごめん。でも」

朝陽「ああ、うん。前はここを併用すること
 もあったみたいだけど、最近ほとんど使
 われてないはず。そういえば、戦前から建
 っているって聞いたような」
 椿「（やや感慨深げに校舎を見る）……。あ、
 たしかここだ」
 椿「あの日、目覚めるとこの教室だった」
 椿「あの日、目覚めるとこの教室だった」
 椿「ここで寝転んでいて……。あ」
 椿「床に落ちているクッションに気が
 つく。古びた教室に似つかわしくない、
 新しいもの。」
 椿「そうだ。あの時は混乱していて気に留め
 なかったが、頭の下にこのクッションがあ
 った」
 朝陽「……（クッションを手に取り）これ、
 椿のだ」
 椿「え？」
 朝陽「椿の家で見たことある」
 椿「……」
 朝陽「周囲を見回す。
 窓際にコンビニの袋が落ちているのに
 気づき、拾い上げる。
 中を見ると、グミやお菓子の袋のゴミ
 がいくつも捨ててある。」
 朝陽「これ、ぜんぶ、椿が好きだったやつ」
 椿「……」
 朝陽「……これ、君は一晚で食べる量かい？」
 椿「（ビニール袋に入っていたレシートを
 見て）このレシート……そのスーパートの
 だ。（日付は六月）昨日のじゃない……」
 椿「目覚めた時、僕は制服を着ていた。傍ら
 には鞆があつて、中には授業で使う教科書
 やプリントが入っていた。ちゃんと登校で
 きるように」
 朝陽「で、でも前の日、椿はあたしと普通に
 一緒に下校して、ちゃんと家の方に歩いて」
 椿「じゃあ帰宅した後、夜にもう一度学校に」

来たんだろう。朝そのまま登校できるよう、
ちゃんど準備もして」

朝陽「橋は、前からここで夜を過ごして、そ
のまま登校していったってこと……？」

橋「たぶんね」

朝陽「（動揺）なんで、なんでそんな……」

橋「……とりあえず、今晚僕はここで過ごし
てみるよ。もしかしたらそれで戻るかもしれ
ない」

朝陽「……」

○朝陽の家・台所（夜）

朝陽、皿洗いをしている手を止める。

水道の水が流れ続ける。

朝陽M「もしかしてあたしは、橋のことをぜ
んぜん知らなかったのだろうか」

○隅田高校・教室（朝）

登校してくる生徒たち。

朝陽、席に座りスマホを見ながら、ち
らちらと入口を見る。

橋、入ってくる。髪は編み下げられて
いる。

橋、ちらつと朝陽を見、気まずそうな
申し訳なさそうな顔で顔をそらす。

朝陽「……わかつてはいたので傷ついては
いないがかすかに落胆の顔」

○同・図書室

「本校の歴史」と書かれた本棚の前に立
つ橋と朝陽。

朝陽「こういうのはだいたいその地域の伝承
とかが関係しているのが相場なの」

橋「（うさんくさげに）なんの相場」

朝陽「映画とかドラマとか」

橋「……（もつとうさんくさげな顔）」

朝陽「仕方ないでしょ！ 映画とかドラマみ
たいなことが実際に起こってるんだから！
じゃあじいさんは他になんか手思いつくわ
け！？」

椿「そりゃ、ないけど」
朝陽「じゃあつべこべ言わず調べる！」

○朝陽の家・朝陽の自室

椿と朝陽、床に座り、一緒に朝陽のスマホを見ている。
『除霊』とYoutubeで検索しているが、怪しげな動画ばかりで朝陽はため息をつき、椿は眉を寄せる。

○神社・社殿

椿と朝陽、胡床に腰かけ、官司に祝詞を唱えながら幣をふつてもらっている。と、突然朝陽がしゃっくりが止まらなくなる。
困る椿。官司、祝詞をやめるか迷いながらちらちらと朝陽を見る。

○同・境内

椿がしゃっくりで疲れた朝陽を支えながら、二人で神社を出る。
椿「性格の悪さが神罰を招いてしまったのかな……」

朝陽「ヤブだよヤブ！」

椿「それを言うならエセじゃないか？ ヤブは医者じゃない？」

朝陽「うるさいな！」

○朝陽の家・朝陽の自室

朝陽、自分のスマホでYoutubeを開いており、「入れ替わり元に戻す」と検索する。
『もし異性と入れ替わったら！？』
『誰にでもできる！コイン入れ替えマジック』『ドッキリ！部屋の中身全部入れ替える』などの動画。
ため息をつき振り返ると、椿がスマホを見ながらペットボトルのコーラにメントスを入れようと動いている。
慌てて止めようと動く朝陽。

× × ×
並んでコーラまみれの椿と朝陽。

○同・居間

椿と朝陽。

椿、テレビでYouTubeの化粧指南動画を見ながらノートを取っている。

朝陽、それを見ている。

と、YouTubeに映画の広告が流れだす。

戦時下の特攻兵を題材にした映画。

朝陽、ぎよつとするがどうすればよい

のかわからない。

広告の声「なぜ彼は命を差し出せたのか。感

動の物語、八月公開」

広告が終わり、次の動画に移る。気ま

ずい沈黙。

椿「……まあ、時代だな」

朝陽「え？」

椿「国中が火が付いたみたいと同じことしか

言わない時代だったから。ああなるともう、

その中で違うことを考える方が辛い」

朝陽「……」

椿「だから、あの時代にいれば誰だって同じ

ことができるさ」

朝陽「（何と答えればよいのかわからない）」

椿「まああと、どうせみんな死ぬと思っただけ

からあとはいい死に方を選ぶだけみたいなの

——（朝陽が困惑しているのに気づく）ご

めん。つまらない話だ」

朝陽「え、いや……」

朝陽「（気まづげに）あのさ……あんた、な

んか心当たりないの？」

椿「心当たりとは」

朝陽「この世界に戻ってきた原因というか、

この世界への心残り、みたいなの」

椿「心残り、か……」

朝陽「……」

椿「（微笑み）特にないかなあ」

朝陽「……ええ？」

椿「あ、強いて言うなら」

○区立図書館・館内

洋書コーナーに立つ椿と朝陽。

大量の分厚いハードカバーの洋書。

椿「これ全部読みたいかな」

朝陽「勝手に読んでろや。：：全部？」

椿「（朝陽の顔を見、笑って）冗談さ」

× × ×

文庫のコーナー。

見ていた椿、ふと目を止め、ある文庫

を手に取る。

『日本のなかの英文学』という本。

椿、その本を見つめる。

○隅田高校新校舎・教室

放課後、教室に残っているのは椿と朝

陽のみ。

黒板に期末試験の時間割が書かれてい

る。

頭を抱える朝陽。

朝陽「ぜんぜん進展してねえ：：」

椿「まあまあ：：」

椿、自分の机から数冊の本を取り出し、

朝陽の前に置く。『オデュッセイア』

『アンティゴネー』『魔の山』『チボ

ー家の人々』など。

椿「少し気晴らししたら？」

朝陽「じいさん：：せっかく現代に來たんだ

から、現代の本読みなよ：：（本を手を取

り）こんなわざわざ読む奴の気が知れな

いわ。面白いのこれ」

椿「まあ、そこそこね。古典っていうのは、

世界中の人が読み継いできたものだ。それ

を自分だけ知らないままにいるなんて、癩

に障るじゃない？」

朝陽「まったく障んない。興味ない。それよ

り大丈夫なの？明日から期末試験だけど

あんた高校の内容覚えてんの？じいさん

の頃と変わってる内容もあるんだよ？」

橋「まあどんと構えていてくれよ。君から貰った対応表を勉強して、最近はめつきり旧字を書くこともなくなってるよ」

朝陽「テスト以前の問題だろそれは！」

橋「……僕は大学では西洋史を専攻していてね」

朝陽「聞いてないんだけど」

橋「これ」

朝陽「清瀬尚浩『日本のなかの英文学』を差し出す。

橋「僕？なに」

朝陽「僕の大学の先生の本だ」

橋「僕の声にあまりにも想いが込められていて、朝陽黙る。懐かしみ、愛おしむ声。

橋「清瀬先生。酒が大好きな先生で、大学でも隠れて酒を飲みながら洋書を読んでいた。僕が読みたいと頼むといつも快く原書を貸してくれた。二年前のことだ。……いや、僕にとっては、か」

橋「文庫の折り返しの著者紹介に記されてる著者の生没年を見る。1895 | 1966。

橋「いつもどこか悲しげな顔をしているのに、口を開くと愉快な先生だった。僕が今20年2年にいるって知ったら、先生、どんな顔するのかな……」

朝陽「……」

○新宿駅
行きかう雑踏。

○大型書店
橋と朝陽、書店に入る。

朝陽「ああいう昔の教授の本とかも、ここなら置いてるんじゃない」

橋「……」

朝陽「……」

橋「……」

朝陽「……」

橋「……」

んだが、それにしてもこれは……しかし、随分と綺麗になったもんだなあ」

朝陽「綺麗？」

椿「ああ。百貨店みたいだ。まあ、それは本屋に限らないけど。どこにも痰とか糞とか落ちてないし」

朝陽「（ぎよっとして）糞？」

椿「僕の頃はどこもかしこももっと汚かった。そのへんを汚れた野良犬だの様子のおかしなおやじだのがうろついてたもんだけど」

朝陽「なにそれ……」

椿「（洋書の棚に気づき）あ！こんなに」

朝陽「あ、目を輝かせて本棚を見る椿。」

朝陽「（本から目を離さず）うん」

× 雑誌コーナー。

× 朝陽、読んでいた雑誌を戻し、洋書のコーナーに戻る。

朝陽「……じいさん？」

朝陽「……先ほどの場所に椿がいない。」

朝陽「朝陽、周囲を見渡し、周囲を探す。」

朝陽「朝陽、歩きまわり椿を探す。」

朝陽「朝陽、歩きまわり椿を探す。」

朝陽「（歴史の棚で本を読んでいる椿に気づく。）

椿「あ、ごめん」

朝陽「（安心した自分に少し驚いている）」

椿「どうかした？」

朝陽「朝陽、腹立たしく、椿の足を向こうずねで蹴り、

朝陽「なに読んでんだよ、あんたが洋書読みたいっていうからせつかく……」

椿「ほら、これ見て」

椿が手に持つ本のページを見せる。

『高度経済成長期』という見出しで、かわいらしい猫のマスケットキャラクタ―が団地の一室でテレビ、冷蔵庫、洗濯機の三種の神器を見て感動しているギャグテイストのイラストと、高度

経済成長期についての説明。

本の表紙を見ると、『しゅんぱちでわかる日本の歴史 昭和レトロ編』と書かれており、マスケットキャラクターが昭和半ばごろの商店街で駄菓子を食べているイラストが描かれている。

朝陽「え、これが何……」

椿「（おかしそうに）めちゃくちゃ変じゃない！？」

朝陽「は？」

椿「（笑いだし）ほら、これとか、これも」

椿「え、おかしくない？」

朝陽「（紹介してるのさ）」

朝陽「（笑いが止まらない）」

朝陽「あんたのツボわかんねえわ」

○隅田高校新校舎・教室（日替わり）

試験中。

教師が教卓に座り、生徒たちが下を向いて試験問題を解いている。

黒板に大きく『期末試験 数学Ⅱ』

9・001000と。
朝陽、試験問題に書き込みをしているが、わからず、諦めた顔で顔を上げる。椿に目をやると、穏やかな顔でシャーペンをゆらゆらと揺らし、揺らすと曲がって見える錯視をやっている。ため息をつく朝陽。

○同・廊下（日替わり・朝）

生徒たちが何かを見てざわめいている。椿と朝陽、歩いてくる。

生徒たち、椿に気づいて、興奮した様子で、

生徒H「茨城さん！」

生徒I「すごいじゃん、どうしたの!?」
朝陽「？」

生徒たちの後ろの壁に期末テストの上位成績者が張り出されている。
『総合成績』の一番上に『一位・茨城椿』。

朝陽「は？」
その横に各科目ごとの上位成績者も貼り出されているが、すべて一位に茨城椿とある。

朝陽「……はあ!?」

○同・教室

テストの返却。

教壇の上の教師C、狼狽と嬉しさが混

教師C「全教科ほぼ満点。圧倒的学年一位です」

ざわめく生徒たち。あっけらかんとしている椿。

× × ×
休み時間。机に座った椿とそばに立つ朝陽。

生徒たちが遠巻きに二人をちらちらと見ている。

椿「まあ、そうなるだろうね」

朝陽「そうなるだろうねじゃねーよ!」

椿「僕は卒業後も京大に残るよう教授から言われていたし」

朝陽「は？ 京大？」

椿「横須賀中にも三高にも京大にも優秀な奴はたくさんいたけど。正直、負けたと思つたことは一度もなかったな」

椿、ゆったりとしかし不敵に笑う。

朝陽「……」

椿「(ふざけて)まあ学徒徴兵で卒業する前に死んじゃったんだけどね。いやあ、もし生き残っていたら、僕は絶対に歴史に残る

朝陽「あんた……」
学者だっただろうになあ」

朴「あの……」
 樞「……」
 樞「茨城さん、ちょっと教えてほしいんだけど……（英語のテスト問題を見せ）この整序なんだけど、どうやって導くのかかわからなくて」
 樞「これは直前に and があるでしょう。And は同じ資格を持つもの同士しか結ばないから、次に来るのはこの have と同じ……」
 朴「そっか……すごい、わかりやすい！ ありがとう」
 樞「よかった。こういうのはコツがあるから」
 朴「……あの、茨城さん。もしよかつたらな……」
 樞「いかな」
 樞「あとで？」
 朴「他にも色々聞きたいところあって……って、無理だよ。ごめん」
 樞「いや、私はぜんぜん構わないんだけど……（朝陽を見る）」
 朝陽「なんであたしに許可求めんの。……あなたの好きにすれば」
 × 放課後の教室。×
 樞、朴に勉強を教えている。
 樞、樞の説明に感動したようすで頷く。
 樞「それを見ていたクラスメイト二人が近寄ってくる。」
 × 十人ほどの生徒が机を寄せ合って勉強している。
 樞が教えているほか、生徒同士で教え合っている生徒もいる。
 生徒 J 「なるほど！ 理解理解」
 生徒 K 「おもしろ」

○ 同・教室の外

朝陽「扉の外で腕を組み、教室の中の話し声を聞いている。樞、扉を開け顔をのぞかせ、朝陽を見る。」
朝陽「ちよっと見にきただけ。繁盛してるみたいじゃん。じゃ（去ろうとする）」
樞「朝陽！」
朝陽「……なに」
樞「君の期末の点数、何点だっけ」
朝陽「……」

○同・教室

勉強会に朝陽も加わっている。いかにも不機嫌そうな顔で肘をついている朝陽に、不安げな周りの生徒たち。朴の勉強を見ていた樞、顔を上げて、樞「顔を上げて」あ、じゃあここ、朝陽に朝陽「は？」
朝陽「怒ろうとして、周りの存在を思い出しひきつつた笑み。」
樞「（笑顔で）朝陽ベクトル得意でしょ？人に教えるのと知識が定着しやすいんだよ」
朝陽「……まあ、樞が言うなら」
朝陽「引きつつた笑みで立ち上がり、朴のそばに行く。」
朝陽「……どこがわからないの」
朴「あ、あの、ここなんですけど……」
朝陽「これは……（教える）」
教師C、廊下からそれを見てほほえむ。

○同・廊下（夕）

勉強会を終え、喋りながら帰っていく生徒たち。
樞は生徒二人と話している。朝陽が人と離れた窓際でむすつとスマホを見てみると、朴がやってくる。
朴「秋濱さん！」
朝陽「？（顔を上げる）」
朴「あの、さっきはありがとう、教えてくれ

生徒 H 「じゃねー！」
 生徒 I 「まじでありがとね！」
 樞、笑顔で手を振る。
 と、教師 C がやってくる。挨拶する生徒 H、生徒 I に手を振り、樞に、
 教師 C 「おつかれ、茨城」
 樞 「いえ」
 教師 C 「いやー、生徒たちがこうやって自主的に学ぼうとしてくれるほど嬉しいことはないよ。何か困ったことがあったら言わない。ほんと、心配してたけど、これなら医学部も心配いらなそうだね」
 樞 「：：医学部？」
 教師 C 「ああ。親御さんが反対してるんだけど、私の成績ならぜんぜん国立狙えるよ。うん、奨学金だって。ほんと、頑張ったんだねえ」
 樞 「：：」
 教師 C 「（感動して）本当に偉いよ。じゃ、もう遅いから、早めに帰るんだよ」
 教師 C、手を振り去っていく。
 残される樞。
 × × ×
 朝陽 「少し離れた窓際の、朝陽と朴。」
 朝陽 「変なこと訊くんだけ：：」
 朴 「なに？」
 朝陽 「旧校舎について何か知ってたりしない？」
 朴 「旧校舎って、あの校舎裏の？」
 朝陽 「そう。や、なんかこの間、旧校舎でちよつと、変なことがあって。なんか謂れとかあるのかなって」
 朴 「うーん、私は何も聞いたことないかな」
 朝陽 「だよ。ごめん、変なこと訊いて」
 朴 「役に立てなくてごめんね。友達にも訊い

朝陽「え？」
 橋「航空隊の時。誰もいない海の上を飛んで
 いると、本当に気持ちよくてね」
 朝陽「へえ……」
 橋「……月の綺麗な晩だった。僕が死んだ夜。
 高度六千メートルの海上。雲海ははるか下
 に抜け、月と星の下に僕らだけ。夢の世界
 みたいだった……」
 朝陽「（何と反応していいのかわからず）」
 朝陽「（朝陽の反応に気づき）ごめん」
 朝陽「いや、そんな……。あ、ほら！ 私た
 ちの学校あれだよ」
 橋「橋の手を引き、指さす朝陽。」
 朝陽「本当だ。君の家がああたりか」
 朝陽「そう！ あ、あそこ。花火大会の時は
 あそこから花火が発射されるんだよ」
 橋「へえ。両国川開きの花火か……（身を乗
 り出す）」
 朝陽「……。見に行く？」
 橋「……いいのかい？（恥ずかしげに笑う）」
 朝陽「うちらはもう慣れてるけど。あんた、
 出身横須賀なんだっけ」
 橋「ああ。幼い頃、花火が上がる日は毎回楽
 しみだった。支那事変——日中戦争以来、
 花火は自粛で上がらなくなったから、もう
 七年は見えていないけど」
 朝陽「そっか……。じゃあ、次の花火大会、
 一緒に見に行く？」
 橋「……いいのかい」
 朝陽「当然。（照れ隠しで早口になり）昨日
 言ったでしよ。あんたのしたいこと叶えて、
 成仏させるって」
 橋「……ありがとう」
 橋、顔をほころばせる。

○隅田川の川辺・道（夕）
 橋「今日はあるがとう。おかげですごく楽し
 かった」
 朝陽「……成仏してないじゃん」

椿「だね。花火見たら成仏するかも」
 朝陽「調子乗んな！」
 朝陽「……。（立ち止まる）あのさ」
 椿「？（振り返る）」
 朝陽「紙包みを突き出す。」
 朝陽「ん」
 椿「？」
 朝陽「ほら！ いらなの！？」
 椿「え……。くれるの？」
 朝陽「だからそう言っただじゃん！」
 椿「ええ、なんだろ」
 椿「笑い、紙包みを受け取り、開ける。
 『しゅんぱちでわかる日本の歴史 昭和レトロ編』が出てくる。」
 椿「これ……。（本を見つめる）」
 朝陽「ほんと、バカみたいな本。……気に入ったみたいだから」
 椿「……。（本を見つめたまま、微笑み）ありがとう。大事にする」
 朝陽「……好きにすれば！」
 朝陽「勢いよく走り出し、堤防の階段を駆け上がるようにする。
 と、スマホの音が鳴り、階段の中腹でスマホを開く。
 目を見開く朝陽。
 椿、追って上がってきて、
 朝陽「……。（椿を見る）」
 朝陽のスマホ。LINEのチャット画面。
 へ朴…私のお母さんが卒業生だから訊いてみたんだけど」
 へ朴…旧校舎、有名な怪談があったみたい」
 へ朴…夏の夜中に旧校舎に残っていると、幽霊に体に乗っ取られるんだって」

○ 隅田高校・旧校舎（夜）
 旧校舎入口に立つ椿と朝陽。

朝陽「：：ねえ、やっぱり一回家に戻ってか
らのほうがいいんじゃない」

椿「なに弱気なこと言ってるんだい。夏の夜
がいつからいつまでを指すのかもわからない
いし、調査の試行回数増やすのに越したこ
とはないだろ」

朝陽「いやだってそもそも不法侵入じゃ」

椿「：：朝陽さん」

朝陽「な、なに」

椿「規則と約束の違いが分かるかい？」

朝陽「は？」

椿「約束と違い、規則は破られるためにある
ということだね。よし行こう」

朝陽「ちよっ、待ってってば！」

椿「朝陽の手を引いて旧校舎に入って
いく。」

椿「規則なんて東大の青瓢箪に食わせておき
たまえ！」

○同・同・廊下（夜）

椿と朝陽、暗闇をスマホのライトで照
らしながら進む。

朝陽は椿の袖をつかみ、隠れるように
歩いている。

朝陽「絶対離れないでよ」

椿「離れられないよ」

と、後ろで何かが倒れる音がしてびく
つく朝陽。

朝陽「うわっ！」
朝陽が振り向きライトで照らすと、ね
ずみらしき小さい生き物が走っていく
のが見える。

朝陽「（ほっとして）なんだ：：」
朝陽、顔を戻すが、椿が見えない。

朝陽「：：じいさん？　じいさん！」

椿、急に寒気がして、二の腕を抱える。
椿、混乱のまま前に進もうとして、す
すり泣き声に気づく。

女の声「（泣いている）」

朝陽、声のほうに進む。
 廊下の曲がり角を曲がると、制服姿で
 髪を下ろした椿が座り込みすすり泣い
 ている。
 朝陽「じいさん！」
 朝陽、駆け寄ろうとするが、おかし
 いことに気づき立ち止まる。
 椿、朝陽にまったく気づいていないよ
 うです、耳にスマホを当て、誰かと通
 話している。
 椿「……うん。なんでもない」
 朝陽「……何かに気がつく」
 椿「急に電話してごめんね。うん。おやすみ、
 朝陽」
 朝陽「……！ 椿！」
 椿「朝陽さん！」
 朝陽「後ろから私服の椿が朝陽の肩を叩く。
 朝陽「（私服の椿を認め）あ……」
 椿「よかった。急にいなくなるから」
 朝陽、振り返るが、先ほどまで座り込
 んでいた制服の椿の姿はない。
 朝陽「……」
 椿「どうかした？」
 朝陽「いや……」
 椿「！」
 廊下の奥から足音が聞こえてくる。
 椿、朝陽の口を押さえ、足音が聞こえ
 るほうを見る。足音が近づいてくる。
 朝陽「！（椿を振り切ろうとし）椿……椿
 なの！？」
 椿「朝陽さん……！」
 月岡「はい残念。茨城椿じゃないんだな」
 近づいてきたのはヤンキーふうの少年、
 月岡雪杜（16）。
 月岡「こんばんは。いい夜だな、優等生さん
 と地雷女さん。いや、幽霊さんと地雷女さ
 ん、かな」
 朝陽「（驚愕）あんた……！ 同じクラスの
 ……！」
 月岡「（笑う）」

朝陽「……誰だっけ」
橋「（小声で）月岡さんだよ。ほら、実家がお寺の」
月岡「……」

○同・同・教室

橋、朝陽、月岡。

机の上にキャンペーン用ライト。

月岡「次元のゆがみだから、時空のひずみだからねえけど。この校舎はそういうのに繋がりがやすいんだよ。昔から変な現象がよく起こる。だからたまに見回りに来てるわけ」

朝陽「なんであんたが」

月岡「（面倒くさそうに）好きで来てるわけじゃねえよ。でも面倒起こってから頼られんのも嫌だし」

朝陽「（うさんくさげ）」

月岡「茨城橋が夜にこの校舎に来ることに気づいたのは最近だった。注意しようとも思っただし、なんか話しかけづらくてさ」

朝陽「は？ 知ってたの？」

月岡「そしたら急に茨城がおかしくなるだろ。黒板に旧字体書いてたのあれ面白かったな。

朝陽「やちちまつたなうって思ったわ」

朝陽「なんで……あんたが止めてくれてたら！」

月岡「（面倒そうに）やめろよな。だから今来てやってんじゃん。そうしたいならちやんと茨城橋、戻してやるから。その（橋を指さす）幽霊を出して」

朝陽「戻……え、戻せるの!？」

月岡「まあな。ちよっと色々調整いるけど、たぶんいける」

朝陽「……！（安堵）……え、待って。あんた、ずっと気づいてたってこと？ 橋が……」

月岡「（首を掻き）うん」

朝陽「（月岡につかみかかり）てめえ！」

橋「朝陽さん！（朝陽を抑えようとすする）」

月岡「ありもうめんどくせえ……これだから
やなんだよ」
橋「月岡くん。僕は茨城さんにこの体を返し
たいんだ。元に戻してほしい」
月岡「まあ、あんたが望むならいいけど。で
も本当にいいの？ そのままにした方が四
方丸く収まって平和なんじゃねえの」
朝陽「てめえ、何言ってるんだよ」
月岡「あんた友達なんだよな？ 茨城橋の。
じゃあ、わかるんじゃないかねえの」
朝陽「……は……」
月岡「（ため息をつき）その幽霊さんには、
死んだ自覚はあるわけ？」
橋「ああ。昭和二十年七月十四日未明、四国
沖で乗っていた飛行機を撃墜された」
月岡「（顔をしかめ、ぼそっと）……最悪」
朝陽「橋と朝陽、聞こえず、
朝陽「なに？」
月岡「……。これは『死の縁で生きたいと心
から願った者の魂が、死にたいと心から願
った者の肉体に入る』現象。わかる？ 茨
城橋は死にたかったんだよ。体から魂を離
してしまいうほどに」

○隅田川にかかる橋（夜）

橋「橋の半ばで、柵に寄りかかる橋と朝陽。
朝陽は眼下の隅田川を見下ろしている。
橋「とにかくよかった。これで元通りだ」
朝陽「……」
橋「しばらく時間がいるって言ってたけど、
準備できたら元に戻すって約束してくれた
し……これで安心だね」
朝陽「……」
橋「しかしこの世にこんなことがあるんだね
……朝陽さん？」
朝陽「……あたし、本当は気づいてた。橋が
苦しんでるって」
橋「え？」
朝陽「橋がいなくなる数日前、夜に突然あた
しに電話してきたの」

朝陽「でも何も話を聞かなかつた。悩みとか
 そういふのつて、結局他人にはどうもでき
 ないこと、自分でどうにかするしかなか
 て、傷をなめ合うみたいになつた。そんな
 たくなくて。本当の友情ってそんなじや
 ない。一人だけでも立てる人同士の間にし
 か存在しないはずじゃない。あたしは偽物
 の友達なんかじゃない。インスタで繋がっ
 てるだけの友達じゃない。たつた一
 人でいい。本当の友達がいてくれたら。そ
 う、思つてたのに……」
 朝陽「朝陽、涙声になる。」
 朝陽「ばかみたい。そのせいで、たつた一人
 の大切な友達をなくしちゃつた。椿がこの
 まま戻つてこなかつたら、あたしのせいだ」
 椿「……」
 朝陽「……」
 朝陽「あたし……」
 椿「朝陽さん！」
 朝陽「……」
 椿「でも間に合う。君はまだ間に合うんだよ。
 茨城さんを取り戻せる」
 朝陽「椿……」
 朝陽「茨城さんは、医学部への進学をご両親に
 反対されていたみたいだつた」
 朝陽「（思い当たり）あ……」
 朝陽「ある……けど。けど、あたし、自分以
 外の親なんて、椿の親、くらいしか……だ
 から……（顔色が悪くなつていく）」
 椿「椿、眉を寄せ少し考えたのち、
 椿「人様の家族のことを悪く言うのはと思つ
 てたけど。この時代がどんな時代だつたと
 しても、あれがいい親つてことはないと思
 うな」
 朝陽「……」
 朝陽「茨城さんが夜、家よりもあんな暗い場所
 を選んでたのもわかる程度には……まあ、

朝陽「ご両親にも事情があるんだろうが」
義理なんてない！ あたしが……あたしが
ちやんと聞けてたら……！ ……ううん、
あたしが、ちゃんと聞きだす。意味のない
かもしれない。あたしじゃ王子様にはなれ
ないかもしれない。それでも、あたしは
……あたしが、橋にいてほしいから……！
橋、朝陽の背に手を回し、そっと抱き
しめる。
橋「君はかっこいいなあ。子供さんたち。ど
うか君たちが、もう一度手をつなげますよ
うに」

○朝陽の家・玄関の前（夜）

アパートの玄関前の通路でこそぞ喋
る橋と朝陽。

橋「やっぱり迷惑じゃ」

朝陽「うるさいなぐちぐち！ （鍵を開けド
アを開き）ただいま！」

紫暮、小走りでやってきて、

紫暮「おかえり！ 橋ちゃんようこそく！」

橋「夜分に急にすみません。お邪魔します」

紫暮「あがつてあがつて！ ひさびさに会え
て嬉しい。てか朝陽は連絡遅すぎだから。

何時だと思ってるの」

朝陽「忙しかったんだってば！」

紫暮「LINEくらいできるでしょ！」

橋、言い合う母子を見てほほえむ。

○同・食卓（夜・点描）

三人で夕飯を食べている。

橋が茄子の漬物を取るが、皮が切れて

おらずつながったまま。

笑う三人。

○同・朝陽の自室（夜）

パジャマ姿の橋と朝陽。橋は床に敷か

れた布団に座り、朝陽はベッドの上。

橋「ほんと、いいお母上だね」

朝陽「……まあね。あたしを一人でずっと育ててくれて、感謝してる。電気消すよ」

朝陽「ありがとね。今日は、いろいろ……」

椿「こちらこそ。今日は楽しかったよ」

朝陽「……ねえ」

椿「なんだい？」

朝陽「……あんたのこと、聞いてもいい？」

椿「……」

朝陽「別に、言いたくないならいいんだけど」

椿「いや……前に、大学が京都だった話はし

ただろ。あの頃は本当に楽しかったな。よ

く昼間から先生の家に上がって先生と一緒に

に酒を飲んだ。庭の草木が日に照り返して、

それはもう綺麗だった……」

朝陽「へえ……。ねえ、あんたの家族は、ど

んな人だったの？」

返事はない。朝陽、寝たのかと諦める。

暗闇の中、無表情の椿。

○イメージ・日本家屋の庭

宇賀の夢。陽光きらめく日本家屋の庭。

着物姿の頭が気づいて笑う。

頭「宇賀さん」

○朝陽の家・朝陽の自室（朝）

眠る椿。

椿「（寝言でつぶやく）……頭さん」

椿、目を覚ます。

窓から穏やかな朝陽が差し込んでいる。

朝陽、ベッドの上に座り、椿を見ている。

る。

椿「……？ おはよう」

朝陽「じいさん。京都に行こうか」

○東京駅・ホーム

椿、ホームの売店で駅弁を買い、乗車

口で待つ朝陽と一緒にひかりに乗り込

む。

○東海道新幹線ひかり・車内

席で駅弁をあける二人。

橋「レシートを確認し、

橋「いつまでたつても気持ち悪いなこの物価

は：：（車窓の外の色景色のスピードを見）

京都にも、数時間で行けるんだねえ」

朝陽「：：：頭さん。その人が、清瀬先生の姪

なんだ」

橋「ああ。綺麗な人だった。（優しい顔で）

そういえば少し茨城さんに似ているかもし

れないな。濡れた紫陽花のような：：いや、

董かな。百合かも。いや」

朝陽「そこはどうでもいいんだけど」

橋「結婚すると思っていた」

朝陽「：：：」

橋「時局が時局だったから、正式に約束はし

なかつたけど。頭さん、どうしたんだろう。

どうか無事終戦を迎えて、幸せに過ごして

いてほしいが：：：」

朝陽「：：：。生きてるかも」

橋「え？」

朝陽「1945年に19なら、生きていたら今

96だよ。京都で清瀬教授の家を訪ねたら、

もしかしたら、会えるかも」

橋「いや：：：」

朝陽「でももしかしたら！」

橋「：：：仮に生きていたとして、先生の家に

はいないだろう」

朝陽「どこにいるか聞いてどこにでも行けば

いいじゃん！」

橋「：：（不安げに、落ち着かない）」

朝陽「そうだよ、もしかしたら：：：もしかし

たら」

朝陽、両手の指を祈りの形に強く組ん

で震わせている。

○京都駅・構内

橋と朝陽。

朝陽、スマホの乗り換えアプリを見な

がら進む。

朝陽「え？ ちょっと！」

慌てて追う朝陽。

朝陽「え……？」

朝陽「え……？」

朝陽「え……？」

朝陽「え……？」

朝陽「え……？」

朝陽「え……？」

○清瀬家・客間

ソファに座る椿と朝陽。

朝陽「えっと、つまり、馨さんは椿のとはこ

で、馨さんと椿のひいおばあさま、のお父

さま……が清瀬尚浩先生だと」

馨「そう。いやー嬉しいな、椿ちゃんの友

達がおじいちゃん、さすがに結婚はしてるよ

朝陽M「やっぱり、さすがに結婚はしてるよ

ね……」

朝陽、そっと横の椿を見る。無表情の

椿。

朝陽「ここには馨さんのご家族が？」

馨「あ、ここは元々ひいおじいちゃん、ひい

おばあちゃん、おじいちゃん、今は私

が一人で住ませてもらってるんだ。大学が

京都だから」

朝陽「ひいおばあちゃん、って」

椿「（唐突に）その着物」

馨「ああ、これ？ 大学でちょっとイベント

があつて、私が着ることになっちゃってさ」

椿「……」

馨「そういえばこれも、ひいおばあちゃんの

朝陽「……」

馨「あ、そうだ、せっかく京都来たんだしひ

いおばあちゃんに会ってく？」

朝陽、思わず勢いよく立ち上がる。

○老人ホーム・廊下

長い廊下を進む馨、朝陽、椿。

朝陽「私まですみません」
馨「うん。嬉しいがるところよ、お父さんの本読んでるって言ったら」

柩、二人の後ろで周囲のドアが開いた。個室を見ながら歩いている。椅子に座って将棋を指しあう入居者の老人や、テレビを見たりする老人。入居者の一人がぼそぼそと『桜井の訣別』を歌っている。老人A「共に見送り見返りて別れを惜しむ折からに……」
柩、彼らを見つめる。

○同・個室内

ベッドの上に、頭（96）が座り窓の外を見ている。机など最低限の家具。机の上には初老の頭と夫の写真が入った写真立てが飾られている。馨が扉を開け、入る。後ろに朝陽、柩。

馨「おばあちゃん、ひさしぶり」

頭「……まあ（馨の方を見る）」

馨「馨だよ」

馨、頭を抱きしめる。

頭「（抱きしめ返し）来てくれてありがとうね」
朝陽、黙って二人を見る。後ろの柩。

馨「今日はね、東京から……」

柩、ずいっと歩みだし、朝陽が止めることもできないうちに頭の前に進む。馨と朝陽、柩の圧に気圧されて黙る。そのまま、しばらく頭の前に立ち尽くす柩。

無言の時間が流れる。

柩「……っ、あ……」

柩、何かを言おうと口を開くが、何も言えず、涙が流れる。

朝陽「……」

朝陽「……」

頭、やがてそっと柩を抱きしめる。

柩「……あき……」

頭 「（優しく）綺麗になつたねえ。椿ちゃん」

頭 「来てくれて、本当に嬉しいわ」

朝陽 「……（焦りの顔）」

椿 「固まっていた腕をそつと頭の肩に
回し、優しく離す。

椿 「急にごめん。この後用事があつて、今日
はもう帰るね。会えてよかった。次は時間
ある時に来るから、その時にゆっくりね。

じゃあ」
そう言うのと背を向け急ぎ足で部屋を出
ていく。

馨 「え？ 椿ちゃん？」

朝陽 「……！（馨に）すみません、ちよつ
と！」

朝陽、椿を追い個室を出る。

○同・入口く門
椿、半ば走って老人ホームを出る。

朝陽 「じいさん！」
椿、門のところまで立ち止まる。

朝陽 「（息を荒げ追ってきて）じいさん……」

朝陽 「え？」

椿 「明野章三郎。僕の同期で親友だった。机
の上の写真に、頭さんと写っていた」

朝陽 「……」

朝陽 「……頭さんは、僕の四つ下でね」

椿 「当時は一月にみな一斉に歳を取る。正月
に家に挨拶に行ったら、せつかく一つ近づ
いても同時にあなたがあつた。変わったしま
うとすねられたことがあつた。変わった人
だつた。なのに、もう……もう、本当に届
かないんだなあ」

朝陽 「じいさん……じいさん、ごめん。あた
ちよつと……」

朝陽 「……」

朝陽 「……」

し
「首を振り」君のせいじゃない。覚えて
る？ スカイツリで見た東京。あんなに
たくさん家があるのに、僕の帰る家は一つ
もなかった。：：ごめん、しばらく一人に
してほしい。後で連絡する」
橋、振り返らず、よろよろと歩いてい
く。
立ち尽くす朝陽。

○同・個室内

ベッドの上でうとうとしている颯と、
机の上を片付けている馨。

颯「：：あら？」

馨「ん？ どうしたの（近づく）」

颯「：：（不思議そうにあたりを見回し）な
んだか、とつても懐かしい人がいたような
気がして：：」

○神社・境内

参拝客たちが多すぎも少なすぎもしな
い小規模な神社。
修学旅行生らしき学ランの男子高校生
たちがみくじを見て騒ぎながら歩いて
いく。

橋、その奥のベンチに座って男子高校
生たちを見ている。

と、気配を感じて下を見る。

綺麗に毛を刈られ、服を着た柴犬が無
邪気に宇賀を見つめている。

飼い主

「すみません！」

柴犬のリードの先の飼い主が駆け寄り、

柴犬をひっぱっていく。
橋、柴犬を笑顔で見送る。

○（回想）隅田高校・旧校舎（夜）

心あらずといった様子で旧校舎を出て
いく朝陽。
そのやや後ろで月岡、橋の肩を掴む。

楢「？（振り返る）」

月岡「ちよつと、話したいことがある」

月岡「あんた、死んだ時の記憶があるんだよ、

な」

楢「ああ。さっき話しただろ。昭和二十年七

月十五日の真夜中、四国の沖合で搭乗機を

撃墜された。高度は約六千メートル――覚

えているさ。あれじゃ助かりようがない」

月岡「（頭をがしがしと掻き）ああ、くそ！

楢「だから嫌なのにな」

月岡「：：。俺らもこの現象についてすべて

知り尽くしてわかんねえし、先祖から代々この

現象見えてきて、その上でたぶんこうだろ

うってだけなんだけど」

楢「？」

月岡「：：。だから、その、『死の縁で生き

たいと心から願った者の魂が、死にたいと

心から願った者の肉体に入る』って言った

だろ。だから、あんたはたぶん――たぶん、

入れ替わった時点ではまだ完全に死んでは、

なかったんじゃないか。だから、戻したら、

死の直前に戻る、かもしれない。あんたは、

撃墜されても即死はしてなくて――：：。嫌

（楢の表情を見て）：：。畜生。だから嫌

だったんだよ：：。」

○（回想戻って）神社・境内

楢「：：。弱い声で、うつつむき、弱

と、子供の泣き声がする。

楢、声の方に行くと、繁みの陰で小学

校低学年ほどの男の子が泣いている。

楢「どうしたの」

男の子A「：：（楢を見て黙る）」

楢「お母さんお父さんは？」

男の子A「：：（泣き出す）」

男の子A「：：（泣き出す）」

男の子A「：：（泣き出す）」

椿「参ったな。(優しく)おいで」
椿、泣き続ける男の子Aの手を取り、
人のいる方へ向かう。

○桂川・川辺(夜)

人々でざわめいている。

スマホを握りしめながら辺りを見回す
朝陽。

椿に気づき、ほっとした顔で走り寄り、

朝陽「じいさん！」

椿、ふっと笑い、朝陽に近づく。

朝陽「よかった。一人で大丈夫だった？ な
にもなかった？」

椿「ああ」

朝陽「(なんと声をかければいいかわからず)
あ……。ここ、馨さんが教えてくれたの。

せつかくだからって。馨さん、大丈夫かっ
て心配してたよ。気にしないでねって」

椿「ありがとう」

朝陽「あ！」

花火が上がり、空が一面明るく照らさ
れる。美しい大輪の光輪。響く火薬音。

朝陽「きれー……」

朝陽「一足先に。好きなんでしょ、花火？」
笑顔で振り向く朝陽。

それを目を見開いて見つめる椿。

× 椿の視界イメージ。 ×

笑顔で振り向く朝陽の後ろに、焼夷弾
が明るくきらめきながら火の雨のごと
く降り注ぐ。焼夷弾が空気を切り裂く
音。

× 椿「――あああああ！」 ×

椿、必死の形相で朝陽の手を引き、花
火と反対に走り出す。

朝陽「(驚き)え？ え？」

朝陽「じいさん！？ じいさん！」

朝陽「じいさん！？ じいさん！」

美しい大輪の花火。轟く火薬音。

○京都のビジネスホテル・客室（夜）

朝陽、ぐったりとした樞を支えながら客室に入る。

カードキーをセットすると電気が付き、テレビも自動的につく。

朝陽「じいさん、なんか食べな。なんか食べよう。しっかり、しっかりして……」

朝陽、樞をベッドに横たえ、冷蔵庫から水を取り出し飲ませる。

後ろのテレビではニュースが流れている。

樞「ありがたい。すまないね、大事な樞さんの体で……」

朝陽「いい、いいから……！」

ニュースがウクライナへの侵攻に切り替わる。

樞、テレビの映像に目を奪われる。

朝陽「もう……！」

朝陽、いらだたしげにリモコンでテレビ映像を消す。

樞「……」

樞、嘔吐する。

○東海道新幹線・車内（朝）

体調の悪そうな樞を支えながら電話している朝陽。

○病院・樞の病室

四つほどの病床がある大部屋。ベッドに横になってる樞。髪は結わ

れておらず、顔は青白くやつれ、見るからに具合が悪そうである。

月岡、ベッドの脇に立っている。

月岡「違う魂への拒否反応が出始めたんだ」

樞「（笑い）当然だな」

月岡「……だが……」
 走ってくる足音。扉が開き、朝陽が病
 室に入ってくる。
 朝陽「じいさん」
 橋「茨城さんなら心配ないよ。軽い熱中症じ
 やないかって。大事を取って一日だけ検査
 するだけだから」
 朝陽「（何と言えればよいかわからない）……」
 月岡「おい」
 月岡「茨城橋を見る橋、朝陽。
 蘭盆——旧暦七月十五日付近だ。逆に、そ
 こを過ぎるにつれ成功率は下がっていく。
 茨城橋の魂が消えてしまう可能性もある。
 盂蘭盆は、今年はたしか八月十五日のはず
 だ」
 月岡「スマホでカレンダーをチェック
 する。今日が七月二十五日。」
 月岡「決行は十五日だ。じゃあな」
 朝陽「……（唇を噛み、橋の手を握る）じい
 さん。何か読みたい本ある？ あのね、電
 子書籍っていうのがあって」
 橋「前、僕の家族はどんな人だったか訊いた
 ね」
 朝陽「え、あ、うん」
 橋「優しい親だった。君と君の母君と夕食を
 食べた夜、懐かしくて泣きそうだった。明
 るく優しい母と、厳しくも研究熱心な父だ
 った」
 朝陽「……」
 橋「でも、笑顔で僕を軍に送った」
 朝陽「この時代に来た時、茨城さんのご両親を
 見て、初めて思った。もしかしたら、僕ら
 の親は、よくない親だったのかもしれない。
 あんなにいい人たちだったの、あんなに
 大好きだったのに、僕らにとっては」
 朝陽「（つらく）いや——それは、それはそ
 うせざるを得ない時代だったからで。そう

「しない。みんな死ぬかもって思ってたから」

椿「……ありがとう。……僕も、そうせざるを得ないと思ったら、君を死なせるのかな」

朝陽「――」

○同・廊下

歩く椿と朝陽。

朝陽「（元気づけようと明るく）屋上からの景色、結構綺麗らしいよ」

椿、談話エリアを見る。いくつかの机

と椅子、テレビが置かれている。

テレビではニュースがウクライナの映

像を流している。

何人かの入院患者、見舞客などが話し

ている。

すみには子供用のエリアがあり、子供

がゲーム機で遊んでいる。

椿「（立ち止まり）……僕のせいだ」

朝陽「え？」

椿「僕が悪いんだよ。僕はなにもしなかった。自分の国が狂っていくのを黙って見てた」

朝陽「え、何言ってる、何言ってるの」

椿「だから当然なんだよ。僕が死ぬのは当然

の罰だ。何も変わってない。僕のいた時代

と同じだ。君たちにこんな世界を残してし

まった。全部無駄だった。僕のせいだ」

朝陽「（椿の肩を掴んで）違う！ 違う。あ

んたは被害者だよ。あんたはただの学生だ

ったんだから」

椿「楽しかったんだよ、戦争」

朝陽「なに……」

椿「僕の父は燃料の研究者だった。英米との

開戦以降、どんどん笑顔が増えていった。

今までとは違う、どんな予算が下りるよ

うになっただけ、なんでも研究できるって」

朝陽「（泣きそう）じいさん」

椿「俺だって同じだ。楽しかった。初めて飛

行機に乗った時。夜空を飛ぶのが好きだった。

言っただろ。夜空を飛ぶのが好きだった。

ら、もしかしたら。もし、もし本当に勝てたらどうする？」

朝陽「（半泣きで）何、何言ってるんだよ」

橋「もしかしたら、俺の国は本当に神の国なのか。世界に一つの神の国なのかも。ねえ、そうだったらどうする！？ 自分の国が特別な国だとしたら」

朝陽「（泣きながら）そんなわけないじゃん、そんなにわけないの、あたしにだってわかるのに、なんで、なんで頭のいいあんたがそんなこと言うんだよ、わけわかんないよ！」

橋「やっぱり死んでよかったんだ」

朝陽「そんなわけない！ そんなわけない」

橋「もし死ななかつたら。もし生きのびたら、あの楽しさを辛さで塗りつぶしていたかもしれない。この罪の重さを思い出さずべきだったんだ」

朝陽「そんなこと、そんなこと絶対にない：あんたは、あんたは：：」

橋「（談話エリアにうづくまる橋と朝陽。）

橋「（自分の体を抱きしめ、朝陽に）もういいよ。僕は残りの時間この体を守る。もう一緒にいる必要はない。君は十五日まで待つていれればいい」

朝陽「じいさん」

橋「迷惑をかけてすまなかった。今日まで、本当に楽しかった。：：もし来世があるなら、君の友達になりたいよ」

朝陽「立ち上がり、去っていく。」

朝陽「立ち上がり、去っていく。」

○同・橋の病室（夜）

橋、ベッドの上に腰かけ、力なく下を見ている。

と、大きな音が響き、橋、びくつと震え音の方を見る。

違うベッドの患者が花瓶を落としていた。橋、震えが止まらず、息が荒くなる。

○ 橋の家・玄関前（夜）

門の前に立ち、家を見上げる朝陽。インターフォンを押す。

○ 病院・女子トイレ（夜）

洗面台の前で、震えながら体を抱きしめる橋。

橋、鏡に映る自身を見る。荒れた長髪。橋、震える手で、髪に手を伸ばす。

○ 橋の家・橋の自室（夜）

朝陽、バッグに橋の服などを入れていく。

机の上を見ると、大学ノートやラテン語、フランス語などのメモが書かれたルーブリーフが置かれている。机の上の本棚の一番手の取りやすい場所に、『しゅんぱちでわかる日本の歴史 昭和レトロ編』がある。

○ 病院・橋の病室（夜）

消灯後の病室。

橋のベッドはカーテンが閉じ、枕元の小さな照明がついている。ベッドの上に座る、荒い息の橋。膝の上にコンパクトミラー。橋、髪を編もうとするが、手が震えてうまく編めない。

○ 橋の家・橋の自室（夜）

朝陽、『しゅんぱちでわかる日本の歴史』を手に取り、めくる。ページの上部に小さな書き込みがあり、手が止まる。『復興の東京』という見出しの横に、小さく『28』と数字が書かれている。

朝陽「――」

めくっていくと、数字が少しずつ大きくなっていく。

× 朝陽のイメージ。×
× 1950年代の東京。建設中のビル。都電が走っている。
× その中を、スーツ姿の宇賀が同じスーツ姿の友人と笑いながら歩いていく。
× 団地の居間。30代の宇賀が子供と一緒に夕飯を食べながらテレビを見ている。頭が食事を運んでくる。
× テレビでは力道山が試合をしている。それを見て笑顔の宇賀たち。
× 宇賀連のデモに参加している40代の宇賀。
× 力強く声を上げている。
× 夜の繁華街。
× 50代の宇賀、友人と酔った様子で笑いながら歩いていく。
× 居間。60代の宇賀、頭とともに『天皇陛下崩御』と書かれた新聞記事を見ている。
× テレビでは小渕恵三が崩御を知らせている。
× 新聞を見つめ続ける宇賀の手に、頭が手を添える。
× 朝陽、耐えられない。×

○ 同・廊下（朝）

朝陽、楯の私物を入れたバッグを持って歩いていく。

○ 同・屋上（朝）

よい見晴らしの屋上。

橋、ベンチに座ってビル群を眺めている。

朝陽、やってきて隣に座る。

橋の髪は編み下げてあるが、今までのように綺麗にまとまっておらず、編み方が粗い。

橋の目は泣きはらし腫れている。

朝陽「……あんたには罪があるの？」

橋「……（うつむき、首肯）」

朝陽「そう。……なら、あたしにもある。だから」

朝陽、橋の手の上に自分の手を置く。

朝陽「あたしが償うよ。あなたのぶんまで」

橋「……違う。そんな必要はない。だって君

はまだ、子供じゃないか」

朝陽「知らないの？ 21世紀では、あと一

年で成人なんだよ」

橋「……」

朝陽「……今更だけど」

朝陽、立ち上がり、橋の前に立ち、右手を差し出す。

朝陽「あたしの名前は秋濱朝陽。隅田高校の

二年生。あたしと、友達になってくれませ

んか」

橋「……（目を潤ませ）僕の名前は、宇賀貞

治。宇賀、貞治だ」

朝陽と橋、微笑み合い、握手を交わす。

橋「よろしく。朝陽」

朝陽「よろしく。貞治」

太陽が二人を照らす。

○隅田公園（夜）

隅田川の河川敷のスペース。

橋、朝陽、月岡。朝陽と月岡が二人で

こそこそ話している。

月岡「なんで俺まで」

朝陽「しようがないでしょ！ 事情知ってる

友達が他にいないんだから」

月岡「事情も何もあんた他に友達いねえだろ」

朝陽「つべこべ言わないでほら！」
朝陽、ベンチの陰からバケツを出し月岡に渡す。

椿「なにしているんだい？」
朝陽「：：あの、ほら、これ」

朝陽「これならもしかしたら大丈夫かなって
：：あんた花火、ずっと楽しみにしてたみ
たいだったから。もちろん嫌だったらやめ
よう。かわりに月岡がそこで踊るから」

月岡「おどんねーよ！」
椿、嬉しそうに笑い、線香花火を手に取る。

椿「これ、まだあるんだね」
× × ×

線香花火をする三人。

花火の玉が三人とも落ちると、椿が立ち上がり、手持ち花火の袋から大きい手持ち花火を出してくる。慌てる二人。
朝陽「いやそれはちよつとあぶないんじゃない」
月岡「光もかなり強いし、ほら」

椿、手持ち花火に火をつける。
大きな閃光とともに花火が噴き出る。
椿、花火を持ったまま嘔吐する。慌てる朝陽と月岡。

椿、しかし嘔吐しながらもけらけらと笑い、手持ち花火を見る。

朝陽「ちよ、もうやめようよ」
椿「悔しいなあ。こんなものに、こんなものに」

椿、泣き笑いで、嘔吐しながらもさらに新しい手持ち花火に火をつける。

× × ×
フラッシュバック。

月岡「病室の椿と月岡。
月岡「いいのかよ、あいつに言わなくて。あんたがまだ死んでないってこと」
椿「ああ」
月岡「：：戻したらあんたはそれから死ぬん

だって知ったら、あいつも気が変わるかもよ」
橋「（笑い）月岡くん。最後までくれよ」
の前で格好をつけさせてくれよ」

× × ×
月岡、自分も手持ち花火をつける。
嘔吐しながら笑い、楽しそうに花火を
続ける橋。

○朝陽の夢・隅田川の川辺（夕）

夢の中らしく、ゆらゆらと揺らいでい

る。
夏祭りらしく、出店が立ち並んでいる
道を、橋、朝陽、宇賀、月岡が四人で

朝陽 M 「その夜、夢を見た。ありえない夢だ。

貞治の顔なんて一度も見たことがないのに、
一目であいつだとわかった。貞治は変に鼻
が高く、大きな口を開けて笑っていた」

○朝陽の家・朝陽の部屋

タブレットで洋書を読む橋。
朝陽はベッドに寝そべりながらスマホ
を見ている。枕元に『魔の山』の文庫

本。

橋 「：：なぜこんなにずっと知りたかったか、

学びたかったのか、最近少しだけわかった
気がする。僕がこの世から消え去っても、
世界中が僕のことを忘れても、僕の中には
何かが残る。そんな気がするからかもしれ

朝陽 「：：あたしはあなたのこと、忘れない

よ。オデュッセウスがナウシカアのこと
を忘れたかったみたい」

橋 M 「でもそれは無理だということ、僕は

知っている。君にはこれから日々が続く
んだから。オデュッセウスも故郷に帰って
愛するペネロペイアと過ごすうちに忘れた
だろう」

朝陽「（布団を敷きながら無表情で淡々と）月岡に聞いた。両者の同意があれば、できるかもしれないって」

椿「それだけはできない」

朝陽「――」

椿「（きっぱりと）それだけはしない。それだけは絶対にできない。その体は君のものだからだ」

朝陽「……」

朝陽「……」

朝陽「いやだ。いやだよ。死なないですよ。こんなのおかしいよ、おかしいだろ！なんだよ、なんであんたが死ななきゃなんんだよ！（涙をこぼす）」

椿「……黙って朝陽のそばにより、

椿「……初めて君を見た時、なんてかっこいい子なんだろうと思った。僕の時代、前線の兵隊に失礼だと思は国防服、女はもんぺしか着なくなつた。軍の同期はあのもんぺが清楚でよいのだと、大和撫子だと言つていたが、僕は本当は、ずっとあれが無粋で嫌で仕方なかった」

× フラッシュバック。 ×

× これまでの朝陽と椿。 ×

椿「朝陽。好きな服を着続ける。君は大丈夫だ。茨城さんと、仲良くね」

○ 隅田川・堤防（日替わり）

朝陽「夜なにがいい？ あたしあれ食べたい

んだよね、ジョージアの……」

風が吹き、朝陽のツインテールについて

朝陽「あつ！ くそ！」

朝陽、リボンを追って芝で覆われた土手を勢いよく駆け上がる。

橋、駆け上がる朝陽をまぶしげに見上げる。日光が朝陽にかぶり、橋、目がくらみ、目をつぶり顔を背ける。その表情はどこか満足げ。

朝陽「貞治？」
朝陽、土手の上でリボンを掴み、土手の下を見るが、草で邪魔になっているのか橋の姿は見えない。隅田川が流れてゆく。

○学校・図書室（数か月後・冬・朝）

朝の静かな図書室。窓から寂しく禿げた冬の木々が見える。冬服の朝陽、一人で電子辞書を置いて英語の本を読んでいる。鞆を肩にかけコートを着た橋が駆け込んでくる。背中に長い髪が流れている。今登校してきたところらしい。

朝陽「（顔を上げ）橋？」
橋、無言で朝陽に封の切られた封筒と書類を差し出す。

朝陽「？」
朝陽、書類を受け取る。書類には『茨城橋様 高等学校生徒医学奨学金支給決定通知書 申請されました高等学校生徒医学奨学金付金につきまして、下記の通り給付することを決定しましたので通知します』等とある。
朝陽「まじで！？ すごいじゃん」
橋「違うの。私、こんなの出してない……」
朝陽「……え？ ——（思い至り）」

× フラッシュバック。×
朝陽の家の前の玄関で、やつれよるけながらもどこかに出かけていく、髪を編み下げた橋。
× 橋、笑顔で振り返り、手を振る。

朝陽「……（呆然と）」

橋「これ、昨日部屋を探したら出てきたの。引出し。秘密の宝物みたい」

朝陽「――」

朝陽「震える手でルーブリーフを開く。かつて朝陽が橋に渡した、旧字体の対応表が書かれたルーブリーフ。それぞれ旧字体の横には、間違えた印らしき×や、蛍光ペンでの印などがいくつもつけられている。」

朝陽「――ああ……ああ……くそ、くそちくしょう、ちくしょう！」

朝陽「漏らすように咆哮し、ふらつくように窓際に向かい、空を見上げ嗚咽。橋「黙って朝陽のそばに行き、うつむき寄り添う。」

○朝陽の自宅・集合ポスト（二年後・夏）

自宅のポストを開ける朝陽（19）。

チラシなど郵便物と一緒に、『投票所入場券在中』と書かれた封筒を二つ認める。

宛名に『秋濱紫暮様』『秋濱朝陽様』とある。

○同・玄関くりビングルーム

朝陽「開玄関のドアにマグネットで二枚の投票所入場券を貼りつける。」

リビングルームではテレビがついており、パレスチナ・ガザ地区での攻撃の様子が続いている。

攻撃が続いている。

了

【参考文献】

- 林尹夫『わがいのち月明に燃ゆ』（筑摩書房、1993年）
蜷川壽恵『学徒出陣 戦争と青春』（吉川弘文館、1998年）
日本戦没学生記念会編『新版 きけ わだつみのこえ』（岩波書店、1995年）
日本戦没学生記念会編『新版 第二集 きけ わだつみのこえ』（岩波書店、2003年）
吉田満『戦中派の死生観』（文藝春秋、1980年）
保阪正康『「きけ わだつみのこえ」の戦後史』（文藝春秋、1999年）

【引用】

William Shakespeare 『Hamlet』
落合直文『桜井の訣別』